民俗学

７．５　いのるアンケート抄-Q.私の呪術体験-

Facebook＆twitter（現 X）「とある民俗学講師（の補足メモ）」

・よくある呪術：てるてる坊主、語呂合わせ、乳歯を投げる、「人」という字をのむ、各種占い、姓名判断、合格祈願…
・呪術「のようなもの」：習慣、ジンクス、（純粋に内面的 or 無目的な）祈願、礼儀作法、神秘体験（金縛り etc）…
・人は自らの努力に結果を求める？　（非合理であろうが）因果関係を求める想像力のたくましさ
・人は些細な出来事に意味を求める？　生活世界を受容／承認するツールとしての呪術
・マスメディアにより普及する呪術、テクノロジーと関連した呪術：呪術的思考の普遍性

［合格祈願］大学入試前、秋田市に単身赴任中の父から「サキホコレ」という秋田県のブランド米と、「サキホコレ」の文字の入ったお守りをもらった。入試の際にはお守りと「サキホコレ」の米を持参し、宿（京都市内）で借りた炊飯器で炊いて母と一緒に食べた。何とか合格して咲き誇ることができたのは、このお米とお守りのおかげだと私は思っている。

［御札］父方の実家（福岡県嬉野市）では、年明けは墓参りの道中で八天神社（嬉野市塩田町）に寄り、御札を買ってキッチンに貼り、家内安全を願うのが恒例となっております。八天神社は、火之迦具土神(火の神様)が主祭神のため、我が家では火難除けといった、縁起にあやかる呪術行為を行っております。

［恋まじない］私の呪術体験は、小学校の頃に流行った、好きな子の名前を消しゴムに書くと両思いになれるというものである。私は小学校を一度転校しており、パリ日本人小学校と名古屋市立植田東小学校に通ったが、そのどちらの小学校でもこの言い伝えがあり、女子たちがこぞって行っていた。

［占い］今年８月、貴船神社を訪れた。本宮では友人とこれからもずっと一緒にいられますようにとお願いした。その後、水に浮かべると文字が浮かび上がる水占みくじを引いた。結果は小吉で、恋愛運には「思い伝えねば整い難し」と書かれており、結構落ち込んだ。本宮から奥宮までは歩いて移動したが、奥宮は人が少なく、夏休みらしい静けさもあって幻想的だった。これまでいろいろな神社を訪れたことがあるが、貴船神社では一番スピリチュアルな雰囲気を感じた。

［鏡］私（高知市出身）が経験した兆占禁呪としては「夜に鏡に写った人間(自分でも他人でも)を写真で撮ってはいけない」というものがあります。といっても、夜中にスマホで何かの写真を撮る際、鏡が画角に写っているのを両親が見て「鏡写っちゅうで」と制止してきたことが何度かあるだけで、実際に撮影したらどうなるかは不明です。

［河童］小学生の頃、近所（東京都世田谷区）に細い路地があり、そこを通るときは息を止めて歩かないとカッパが降ってくると言われていた。その路地は薄暗くて不気味な雰囲気があり、当時は少し怖かったので、言われた通りに息を止めて歩いていた。今考えると、なぜそのような言い伝えがあったのか不思議に思う。実際にカッパが現れるとは思っていなかったが、場所の雰囲気と周りから聞いた話によって、自然とその決まりを守っていたのだと思う。

［蜘蛛］実家（大阪市）にて、朝蜘蛛が出たときは吉兆、夜蜘蛛が出たときは凶兆であるという祖母の言葉を聞いて育ったので、朝蜘蛛が家に出た日には、何か良い結果になるかもしれないと思い、ネットゲームのガチャを回すなどしていました。祖母のルーツは加賀のあたりですが、この話の詳しい由来は知らないそうです。

［厄除け］私にとって最も身近な呪術体験は、中国の「本命年（ほんみょうねん）」の風習です。自分の干支が巡ってく

る年には不運が起きやすいとされ、厄除けのために赤いものを身につけます。私も本命年を迎えたとき、家族に勧められて赤い下着や赤い靴下を履いて過ごしました。中国では「赤」は邪気を払う色とされています。

［疳の虫］親から聞いた話ですが、幼少期、私は大変聞き分けが悪く、所構わずキーキー騒いだり、走り回ったりするという手のつけられない子だったそうです。それを見かねた家族は、疳の虫封じという儀式を地元のお寺さんにお願いしました。唯一覚えているのは、仰向けで寝かされて、お腹に数回お灸を据えられ、なんだか熱く不快な思いをしたことです。その後に、私の聞き分けの悪さが治ったのかは分かりませんが、勉学に励み、結果として大学に入学したのだから、何らかの効果はあったのかもしれません。今では騒がしいどころか、寡黙な人間になってしまいました。（北海道恵庭市）

［御守］中国の杭州にある霊隠寺では、十八籽と呼ばれる仏教信仰に関係する数珠のブレスレットを購入することができる。信者たちは購入後、寺院の香炉の上でブレスレットを時計回りに3回、反時計回りに3回まわすという儀式を行う。この行為には、災いを払い、幸運を招き、仏様のご加護を願うという意味が込められているとされる。儀式を終えたブレスレットは、日常的に身につけ、捨てたり紛失したりしないように大切に扱う。このように、十八籽は単なるアクセサリーではなく、人々の願いや信仰が込められた特別なものだと考えられている。

［人形］私の家の近くの向日神社では、６月と１２月に大祓が行われる。その時期、町内会づてに形代として人型の紙が配られるので名前、年齢を書いてから、体の悪い部分をその紙でさすって（なければ体全身を）最後に数回息を吹きかけて神社に持っていく。神社は高台にあり、近くに川などは流れていないので、お焚き上げでその紙を燃やし、形代に移った穢れを燃やしきる。”穢れ”という、悪さをする何かがあって、それは息を吹きかけるとうまく形代に移ってくれる、ということを仮定した風習だと思われる。

［病なおし］がんを発症している祖母の病気治癒を祈って、蛸薬師堂（京都市中京区）に通った。このお堂は、鎌倉時代に病弱な母のために禁を破って蛸を買った僧・善光の祈りに薬師如来が答えたという由来から、心身の病気平穏やがん封じに特に強い効験があると伝わっている。本堂前には木彫りの蛸の像が安置されており、左手で撫でることであらゆる病が癒されるとされている。週に２回ほど、学校帰りに像を撫でていたが、結局効果が現れることはなかった。

［影踏み］兵庫県宝塚市の山あいにある祖父母の家には、病気や不幸の連鎖を断つ「影踏み」と呼ばれる古い加持祈祷の風習がありました。中学生の頃、部活での怪我や身内の不幸が重なり精神的に追い詰められていた私を見かね、祖母は地元の古い神社から修験道の祈祷師を呼びました。薄暗い和室で線香の煙が満ちる中、般若心経と呪文のような真言が重々しく唱えられました。背中に冷たい刀の背を当てられ、短刀で「悪縁を断つ」所作をされた瞬間、不思議と体の底から重苦しさが抜け落ちる感覚を覚えたのです。科学的根拠はともかく、人の心理や運気を整えるための「呪術」が地域社会で果たしてきた確かな役割と説得力を身をもって実感した体験です。

［生霊？］数年前、父と同僚の女性が父に好意を持ち、手紙を送りつけてきたことがあった。その一カ月後、普段は風邪もひかない私が珍しく体調を崩し、家で寝込んだ。そのとき、隣の部屋にいた母は、高熱で寝ているはずの私が、突然起きた気配がしたという。しかし、部屋をのぞくと、私は確かに寝ていて、母が名前を呼ぶと、それまで寝たフリをしていたかのようにスッと目を覚ましたそうだ。母は、魂だけが抜け出ていたのではないかという。私自身、なにかモヤモヤとしたイメージの世界から、母の呼ぶ声によって突如現実へと連れ戻された、という不思議な感覚が残った。知り合いで信頼のおける霊能者に相談したところ、父の同僚の女性が、父の家族を疎ましく思い、その念が生霊となって私に襲いかかったのだという。もし母が呼びかけていなければ、そのまま私はどこか別の世界へと連れていかれていたかもしれないらしい。その後、お祓いを受けてからはすっかり元気になった。